

# ユーザーレポート User Report

ゼロ  
0の証明

## 「お父さんが、車に轢かれた……」 絶望の淵で家族が選んだ「究極の奇跡」

一升瓶を抱え続けた父と、涙を拭った母。家族を再生させた『魔法のエンジンロック』全記録

個人

ご利用機器

カメラ付き  
アルコールインターロック装置

ALC-ZERO II



### 終わらない悪夢

#### ～抗えない「血」と、鍵を隠し震える毎日～

九州のある静かな町。そこには、外部からは決して見えない「家族の戦場」がありました。主人公は、73歳になる川崎さん(仮名)。長年、建設現場の最前線で土木作業に従事し、監督の立場を担っていた川崎さん。実直に家族を養ってきた誇り高き職人です。しかしその裏側で、彼はある壮絶な「魔物」と戦い続けていました。それは、結婚以来一日も欠かすことのない「猛烈な飲酒習慣」です。実は、川崎さんの父親もまた、名の知れた酒豪でした。「酒豪の家系」という逃れられない遺伝的な気質。彼にとって酒は、単なる嗜好品ではなく、血の中に組み込まれた抗いがたい宿命のようなものでした。焼酎の一升瓶がわずか2日で空になる。医師からの「このままでは命に関わる、今日から止めなさい」という断腸の警告さえ、漂う酒の香りと代々受け継がれた血脈の中に消えていきました。妻のA子さんは、夫が酒を飲んでハンドルを握るのを防ぐため、毎日家中の「鍵を隠す」という孤独な戦いを強いられていました。「どこかで事故を起こして、誰かを殺してしまわないか……」仕事でも、買い物中も、常に頭の片隅には夫の飲酒運転への恐怖がこびりついていました。鍵を隠すたびに夫と衝突し、すり減っていく精神。長年の不安とストレスは、A子さんの心を限界まで追い詰めていました。



※文章、写真の無断転載や抜粋、加工は固くお断りいたします。

### 2023年7月22日、衝撃の電話。 暴かれた「ビール1本」の嘘

その日は、不穏な静寂を破るようにして運命が動き出しました。地域行事で酩酊した夫は、家族の制止を振り切り、ふらふらとした足取りで夜の闇へと消えていきました。その直後に届いたのは、「お父さんが大通りで車に轢かれた」という悲痛な知らせでした。病院へ駆けつけると、そこには首の骨を折る重傷を負った夫の姿。意識が朦朧とする中で夫が警察官に放った言葉は、「飲んだのはビール1本だけだ」といういつもの言い逃れでした。しかし、真実はあまりにも残酷でした。後日、A子さんは夫と一緒に酒を交わっていた知人たちに、あの日夫がどれほど飲んでいったのかを詳しく聞き回りました。「ビール1本どころじゃない。相当な量を、浴びるように飲んでたよ」知人たちの証言から浮かび上がったのは、家族の想像を絶する「泥酔」の事実。警察から提示されたアルコール数値もまた、その証言を裏付けるように、致死量に近い異常な高値を示していました。夫の口癖だった「大して飲んでいない」という言葉が、いかに脆く、危険な嘘であったか。A子さんはその時、涙を流しながらも心の底でこう思ったのです。「ああ、歩いていてよかった。もしあの時、無理にでも鍵を見つけ車に乗っていたら……夫は間違いなく『人殺し』になっていた」被害者になったことで、加害者になることを免れた。その極限の皮肉を突きつけられた家族は、震える手で「今度こそ、この負の連鎖を断ち切る」と固く誓いました。

### 生きがいか、安全か—— 家族を切り裂いた「究極の選択」

病院のベッドで首を固定され、身動きの取れない父。その痛々しい姿を前に、福岡と埼玉から駆けつけた子供たちの心は、かつてない激しい危機感に揺れていました。「お父さん、もう車は絶対にダメ。鍵は返さないよ」それは、父の人生を守るために突きつけた、あえて非情な「引退勧告」でした。あの日、もし父が隠した鍵を見つけ車に乗っていたら、今頃は誰かの命を奪い、加害者として刑務所にいたかもしれない。その恐怖を骨身に染みて感じていた子供たちは、「このまま運転を続けさせれば、いつか必ず取り返しのない悲劇が起きる」と、父の運転を完全に断つ決断を下したのです。しかし、その決断は「父の魂」をもぎ取ることと同義でした。ここは、公共交通機関が限られた田舎町。車を奪うことは、単なる移動手段を失わせるだけでなく、丹精込めて育てたかぼちゃ「恋するマロン」やオクラを運ぶ出荷作業、そして父の誇りである畑仕事のすべてを奪うことを意味していました。

# ユーザーレポート

# User Report

ゼロ  
0の証明

個人

「安全のために車を取り上げ、父を社会から抹殺し、骨抜きにしてみようか。それとも、またいつか誰かを殺すリスクに怯えながら、綱渡りのような毎日を続けるのか」

生きがい、安全か。出口のない問いに家族が絶望していたその時、福岡の娘さんが必死の思いで見つけ出したのが、欧米の法執行機関でも採用されている、『アルコールインターロックシステム』でした。

「吹かなければ、エンジンはかからない」。意志の力では制御不能な「酒豪の血」に、物理的なロックをかけるという明確な答え。「これなら、お父さんの『運転したい』という気持ちを尊重しつつ、お母さんの『不安』をゼロにできる！」

この未知なる技術との出会いこそが、バラバラになりかけていた家族の想いを再び一つに繋ぎ止める、唯一の希望の光となったのです。

事故の翌日、家族は迷わずその導入を即決しました。



## 革命の瞬間

～4ヶ月の静寂を経て、  
軽トラックが「守護神」に変わった日～

首の骨折という重傷から、4ヶ月。長く、厳しい入院生活とリハビリを経て、ついに夫が家に帰ってくる日が近づいていました。しかし、家族の心は晴れません。

「退院すれば、またお酒を飲んでハンドルを握るのではないか」……

その恐怖が、再会の喜びを打ち消そうとしていたのです。そこで家族が動きました。夫の退院に先立ち、彼が何十年も愛用してきた、あの軽トラックに「ある改造」を施したのです。

それは、川崎家にとっての「独立記念日」の始まりでした。

### ■ 「なりすまし」を許さない、冷徹で誠実な目

退院した夫を待っていたのは、ハンドル横に設置された測定器でした。このシステムは、ただ数値を測るだけではありません。吹き込んだ瞬間の「顔写真」を自動で撮影し、記録します。

「お父さんが、自分の意志で、シラフで吹いている」

※文章、写真の無断転載や抜粋、加工は固くお断りいたします。

その確かな証拠がデータとして残ることで、「誰かに代わりに吹かせているのでは？」という家族の疑念は、跡形もなく消え去りました。

### ■ 「魔の90秒」を「安全の儀式」へ

唯一の懸念は、装置の特性でした。特に冬場は、精密なセンサーを温めるために約90秒の待機時間が必要になります。かつてのせっかちな夫なら、苛立ちを隠せなかったはずの時間。しかし、夫はこの「90秒」を、自分自身を律する時間へと変えました。測定の待機中、彼は車から降り、周囲の安全を確認したり、その日の畑仕事の道具を整えたりと、準備の時間として有効に活用するようになったのです。かつての「危険運転の種」だった時間は、今や「仕事への誇りと安全」を再確認するための、神聖な儀式となりました。

### ■ 妻の魂を救った「0.00mg」という光

導入から8ヶ月。システムの管理画面には、一点の曇りもない「0.00」という数字が、行儀よく並び続けています。かつて夫の帰りを怯えて待ち、鍵を隠して泣いていたA子さんは、今、心からの安らぎの中にいます。

「今は、主人が一人で仕事に出かけても、一ミリも心配していません。胸のつかえが取れて、本当に心が洗われるようです」

4ヶ月の入院という「断絶」を経て導入されたこのシステムは、ただの機械ではありませんでした。それは、夫の「生きがい」と、家族の「安心」を同時に守り抜く、文字通りの守護神となったのです。



## 技術が照らす、新しい家族のカタチ

現在、川崎さんは事故以来、奇跡的な断酒を継続しています。それは、システムが「酒を飲めば大好きな車を動かさない」という明確な境界線を引いてくれたからです。

家族は今、さらなる未来を見据えています。「アルコールが検知された時だけ、遠方の子供たちに通知が届くようにしたい」。それは監視ではなく、離れて暮らす家族と「繋がっている」という新しい形の絆です。

「飲酒運転は個人の努力だけでは防げない。でも、技術があれば家族の笑顔を守れる」

川崎家の物語は、日本中の「お酒と運転」に悩む家族にとって、一筋の希望の光です。もう、鍵を隠して泣く必要はありません。技術という盾があれば、大切な人の人生を、尊厳を、そして家族の平穏を守り抜くことができるのです。

# ユーザーレポート User Report

ゼロ  
0の証明

個人

## 編集後記

### 「0.00mg」の先にある、新しい日々

取材班がご自宅を訪ねたとき、ご主人の川崎さんは庭先で元気に立ち働いていらっしゃいました。8ヶ月前、首を骨折して寝たきりだった姿を微塵も感じさせない、力強いそのお姿に私たちはまず安堵しました。作業の合間、川崎さんはふと穏やかな表情でこうおっしゃいました。

「あの事故、車に轢かれた僕にも15%の過失があるんだよ」  
その言葉は、決して自分を責めているのではなく、あの夜の自らの振る舞いを客観的に見つめ直し、今の「断酒」と「安全運転」への誓いをさらに強固なものにされている、誠実な覚悟のようにも聞こえました。また、ご主人を側で見守っている奥様のお言葉が、私たちの胸に深く突き刺さりました。「もしあの時、お父さんが亡くなっていたら……。お父さんを轢いてしまった加害者の方の未来までも、一生台無しにして、断ってしまっていたはず。それが一番怖かったんです」  
被害者でありながら、加害者の人生にまで思いを馳せる。その言葉の裏には、飲酒運転がもたらす「連鎖的な悲劇」を、技術の力で食い止めることができた安堵感と、二度と同じ過ちを繰り返さないという強い決意が滲んでいました。

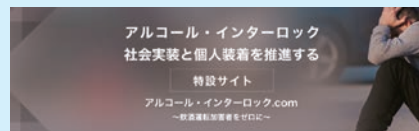
アルコールインターロックが示し続ける「0.00mg」という数字。それは単なるアルコールの有無を示すものではありません。ご主人の健康、奥様の心の平穏、そして「誰の未来も傷つけない」という家族全員の祈りが、その一吹き一吹きに込められています。

庭に咲く花々や、これから旬を迎える「恋するマロン」のかぼちゃたち。川崎さんご夫妻の新しい日常は、技術という名の「守護神」に見守られながら、今日も穏やかに続いています。



## 取材ご協力

家族を守る方法の手段として、  
アルコール・インターロックを導入された  
川崎さん(仮名)ご一家



東海電子WEBサイト  
【アルコール・インターロック.com】  
<https://alcohol-interlock.com/>

## LINE公式アカウント

大切な人の飲酒運転で悩まれていたら…  
いつでもLINEで  
ご相談ください!

@700xyfip

